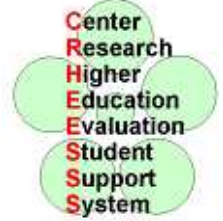


週刊センターニュース No.220



第220号(2008年8月18日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

PC カンファレンス特集号

PC カンファレンス 2008 参加レポート～その1～

(2008/8/6～8/8、於: 慶応義塾大学SFC)

基調講演1 「学習学ことはじめ～勉強から学びと共感へ～」

青山学院大学の佐伯胖氏による基調講演では、教育学や学習科学ではなく、学習というジャンルを考えてその中で教育を見るという「学習学」という考え方を提案していた。これまでの教育は「教える」ことによって学習をコントロールする「勉強」を学習のすべてであるという考え方が中心であった。その考え方により本当の「学習意欲」が失われ、「学びからの逃走」に拍車がかかっている。これまでの「教え主義」の教育から、「共感的参加」型の学習への移行が大切であるとしていた。

人が「学ぶ」とき、「教える」という意図的行為によらず共振、共鳴によって「学んでしまっている」ことがあり、その際に行われている勉強と違う学び、能動的共感性を回復していかなければいけない。自らの身体の「能動性」を拡張することで、他者の行為を自分がやっているように観察し、実感し、取り込むということを重視していた。これを自分の「分身」(こびと)を世界に派遣していると佐伯氏は表現し、その派遣行為が能動的共感であり、これを生み出すものこそが共同注視的まなざしであるとしていた。対象に対する共感する「横並び」のまなざしのできない、横にいる他者を感じられない状況では、学びが存在できなくなるため、教師は学びのための共同体・共振関係を作らなければいけないと主張されていた。「共感的参加」型の学習、学びの姿勢を作るためには場の提供が重要だということに再認識することができた。

この基調講演中に紹介されたものに、P.Bourdieu のハビトゥス (habitus)、M.ポラニー著の『個人的知識論』、佐伯氏の擬人的認識論(『イメージ化による知識と学習』)などがあるが、学びの観点から参考にするのも面白いと考えられる。

基調講演2 「SFC の挑戦: 「未来からの留学生」から未来創造塾へ

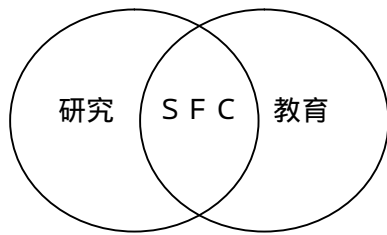
慶応義塾大学熊坂賢次氏による講演は、SFC での実践を踏まえた上で、21 世紀の大学と学生のあるべき姿・20 世紀的知識の伝授という関係性の限界・21 世紀的知識とは何か、という内容で進められた。

SFC は新しい学びの創発を実践するキャンパスとしてスタートし、従来の高度な知識の体系的な伝授を目的とした「教育」体制とは方向性を異にし、「協働的な学習」体制を構築しようと試みてきた。教員と学生がともに研究し学習しあう協働のプロセスに価値が置かれ、社会創造に貢献するような実践的な知識創発が期待されてきた。カリキュラムは「教養と専門」ではなく「先端と創造」により構成され、4つの試みが現代GPに採択された。

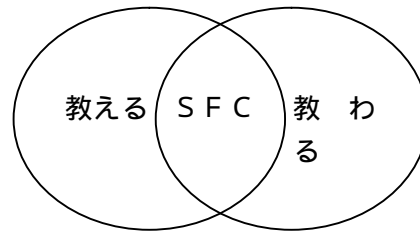
具体的には、学生は1年生からゼミに参加することができるが、当然のことながら知識が不足しており、必要な知識を学ぶために教養科目を選択し受講する。これを「寄り道学習」という。この方法をとると、専門をいきなり学ぶことで、自分に足りない教養的知識に気づき、能動的な学ぶ意欲をもって教養に取り組んでいけるということだそう。

また教師は「教える人」ではなく「学生と一緒にチームで研究し学ぶ人」という立場をとる。教師

も学生も「変わる」可能性を有することとなるが、教師の負担は大きくなるため、教師だけでなく大学院生にも「教える」部分を負担してもらうそうだ。大学院生は「教える人」であり「教わる人」という関係にあり、研究室運営、さらには専門内容の学習者による学びの啓発という意味で積極的に取り入れる取り組みであると思われた。



研究と教育の誘発



半学半教の関係性

実際に本学でも大学院生に実験の補助以外でも学習の補助者としての役割を負担してもらっている実例もあり、こうしたノウハウの共有化をいち早く行うことは本学におけるFD/SDにも有効な手立てであると思われた。

シンポジウム1「プロジェクトを通じた学びとメディア環境」

近年、注目されている授業法に「プロジェクト型授業 (PBL: Project Based Learning)」がある。これは実際にプロジェクトを行いながら、その遂行に必要な知識や技能・経験を養う授業法である。本シンポジウムでは4つのPBL実践例をもとに議論がなされた：(1)eラーニング専門家養成のプロジェクト型実践演習 (北村 士郎 先生, 熊本大学大学院)、(2)ソフトウェア開発によるプロジェクトマネジメント教育 (松澤芳昭, 静岡大学)、(3)経験学習とプロジェクト型授業 (長岡 健, 産業能率大学)、(4)プロジェクトによる学びの創発とメディア (熊坂賢次, 慶応義塾大学)。

PBLは「学びと気づきの場と機会」を提供し、人材育成に向けて知識伝達型の授業では獲得しがたい「知」を生み出すことができる。問題設定や評価基準によって得られる「知」に変化をつけることも容易である。人が必要とする知は多様である点を踏まえ、多様なPBL学習モデルを開発していくことが今後の課題であろう。

(文責：大学教育開発・支援センター - 鎌田 康裕
大学教育開発・支援センター - 末本 哲雄
FD・ICT教育推進室 瀬川 忍)

平成20年度大学コンソーシアム石川FD研修会

(大学コンソーシアム石川 主催)のご案内

日時：平成20年8月30日(土) 13:00~17:50

会場：石川県広坂庁舎1号館(大学コンソーシアム石川, ジョブカフェ石川)
石川四高記念文化交流館

テーマ：「高等教育機関のFD義務化にあたって」

プログラム 第1部 13:10~14:35 基調講演

「FDと大学等の地域連携」田中每実(京都大学高等教育研究開発推進センター長, 教授)

第2部 15:00~16:50 分科会

第1分科会「大学等の認証評価について」、第2分科会「教職協働 - SDの必要性 - 」

第3分科会「学生相談について」、第4分科会「障害のある学生への学習支援について」、

第5分科会「短期大学のFD活動」

【お問合せ先】大学コンソーシアム石川事務局 担当 請田

TEL 076-223-1633, FAX 076-223-1644, E-mail info@ucon-i.jp